

複合災害の時代を迎えて

～事業継続に向けどう備えるか！！～

日 時：令和2年10月26日（月） 16：00～17：00
場 所：三和油化工業株式会社 本社ビル
主 催：三和油化工業株式会社
イベント名：10月度 三和安全の日の講話
参加者人数：17名
講 師：NPO法人 愛知県防災士会 防災士
櫻井 衛 （副理事長・兼 企画委員長）
ファシリテーター：阿部

今回は、三和油化工業様のご依頼により愛知県防災士会として、新型コロナウイルス禍における今年度初の防災講演となりました。

三和油化工業様が実施されている新型コロナウイルス感染防止対策（検温・手の消毒・マスク）に順じて講師共にクリアし、防災講演会場もソーシャルディスタンスの取り組みにより参加人数が縮小され、距離を置かれた座席と講師



セッティングする櫻井講師

は不慣れな全面フェイスシールドを装着して防災講演を始めさせて頂きました。

冒頭、講師が過去に石油精製会社で原油受入れの仕事に携わっていたことを紹介しながら、本題の「複合災害の時代を迎えて」に入らせて頂きました。

いつ起きても不思議では無い南海トラフ巨大地震に対する関心度は、日に日に高まるものの予知が出来ない現実、そして、気象庁から発表される「東海地震に関連する情報」に基づいた避難について認識を深めて頂きました。また、日向灘から東海沖を4つに分けた想定震源域を南海トラフ地震発生に伴う「2段階割れ」、「一部割れ」、そして「ゆっくりすべり」のパターンと避難の在り方を紹介すると共に、公助の手が届くまでの間、最短で48時間は、地域コミュニティによる協力で助け合う「共助」と自ら家族を守る「自助」により生き抜くことの勧めをしました。

また、南海トラフ巨大地震が発生した場合の人的被害は、東日本大震災を想定し、最悪死者数323,000人にも及ぶ。このことから被災人口が余りにも多いため生産拠点に悪影響を与えかねないと言われています。

次に日本列島至るところに存在する活断層につきまして、東海地方や地元愛知県内の過去に発生しました濃尾地震や三河地震のほか、猿投～高浜断層帯と加木屋断層帯、そして、中部圏直下型地震被害想定につきまして、細かく説明をさせて頂きました。

更に、「平成30年北海道胆振東部地震」が、2018年9月6日午前3時7分に発生したことは、まだ記憶に残っている地震であり、防災に関して、いろいろな教訓を残してくれた地震と言え、特に厚真町古野の広域に亘る土砂災害や札幌市清田区里塚の液状化現象、北海道全域がブラックアウト（停電）現象を引き起こしたこと、また、その停電現象から電気に関わる機器の機能停止など、日常の生活の中にいかに電気が浸透しているかが判り、それが、一時使えなくなる不便さをこの地震により体感することが出来たこと、この北海道地震から見えてきたことをジャンル1（乾電池、カセットコンロボンベの買い置き、ペットボトルの有効活用）、ジャンル2（飲み水及び非常食の確保）、ジャンル3（トイレの確保）に至る重要な視点について説明をしながら、普段から7日分の家族の食料等の備蓄をする大切さを切々と唱えました。

続いて、「令和元年東日本台風から学ぶ」から、台風19号に焦点を当て、防災の拠り所とするハザードマップの限界とハザードマップに対する認識の問題を提起し、安全地帯とされる地域に住んでいる場合であっても想定外の気象状況に伴い環境に著しい変化があった場合、安心・安全地域居住の精神を払拭する必要があることを、心の隅に留めて置くようにと、また、期限切れになったペットボトルであっても飲料水として飲むことが出来ることを説明しました。



真剣に聞き入る参加者

後半には「古文書から見えてきたもの」と題して、まず、本社がある刈谷市には「高津波町」という地名があり、浸食谷で渦を為していたことから高津渦と称し、衣ヶ浦の波が打ち寄せることから高津波と呼ぶようになりました。これは先人が高津波が過去にあったことを後人に伝えるための災害警告地名として残したものとされていることの説明から名古屋中心部の古地図と活断層があることを示し、絵や写真からは、今では想像もつかない開発前の昔の様子を計り知ることが出来、防災に役に立つ一つの警鐘となりました。

続いて、BCP（事業継続計画）について触れて説明を行いました。大規模災害発生時の基本的スタンス（自助70%・共助20%・公助10%）を示し、企業が求める平常時の業務の継続及び早期復旧に従いながら災害後に新たに発生する応急業務への対応を想定することが必要となりますが、最終的に全

てが人海戦術に依存することを説き、本社の立地条件により被害のタイプは異なることから、被害を想定して会社独自に合った防災対策（家族の安否確認、避難場所、避難方法）が必要となることを説明しました。

また、タイムライン（防災行動計画）の重要性について説き、発災後だけでなく発災前の対応が鍵となることも併せて強調し、大規模災害発生時に会社と家族を守るタイムラインを早急に策定されるようお願いをしました。

最後に「地震があまり起こらない時期とよく起こる時期」につきまして、地震が発生した時期や地域、規模を表で示し、特に1891年から1961年の71年間の内、6年間に5回（1943年 鳥取地震・1944年 東南海地震・1945年 三河地震・1946年 南海地震・1948年 福井地震）の大地震が発生し、海溝型地震の前後に直下型地震が発生したことが判っており、また、その地震の発生間隔は、おおよそ100年程度ということについても触れ、いつ大きな地震が起きても不思議は無い時期に到達していることを念頭に置きながら備えの重要性を説明しました。

今回の防災講演は、1時間という制限の中、
本日のキーワード

防災 ⇒ 減災

- ・まず、自分が生き残ること。
- ・そして、社員、家族、地域の人と一緒に災害に立ち向かうこと。



地道な対策や訓練の積み重ねが

エンディングを説明する講師

「減災」につながる

を示し、参加者から大きな拍手に包まれながら防災講演を終了させて頂きました。

文責・写真：阿部 健二